

兵庫・但馬国府推定地

1 所在地 兵庫県城崎郡日高町水上・松岡
2 調査期間 一九八六年(昭61)九月～一九八七年一月
3 発掘機関 兵庫県教育委員会
4 調査担当者 吉識雅仁・甲斐昭光
5 遺跡の種類 官衙跡
6 遺跡及び木簡出土遺構の概要
7 遺跡の年代 平安時代～鎌倉時代



(出石)

但馬国府は『日本後紀』延暦二三年正月壬寅(二六日)の条に「遷但馬国治於氣多郡高田郷」とあることから、移転されたことが窺える。国府の推定地として合せて七カ所の説が唱えられており、調査地はその一つである。国道のバイパス工事が計画され、昨年度確認調査を実施したところ、深田地区で木簡三点を含む、多量の遺物が出土している。

凹地の内部からは、木簡の他に、木履(二三点)、人形・馬形・鳥形等の木製模造品、曲物・挽物・箱・斎串・檜扇など、木製品約三五〇〇点、須恵器・土師器の坏類、硯類、灰釉・綠釉陶器・黒色土器などの土器類、帶金具等の金属製品が出土している。また「柔」「井」「國當」「福」「東成」「養父」などの墨書き土器も多量に出土している。

調査区は、円山川左岸の沖積地に位置し、微高地と、それに挟まれた低湿地にまたがっている。付近には奈良時代から平安時代の遺跡が多く知られており、調査区の南西約六〇〇mには国分僧寺、北西約五〇〇mには国分尼寺が存在する。また東一〇〇mには川岸遺跡が存在する。

調査区の東半と西端が微高地であり、調査区中央では、北に開いた沼状の凹地が検出された。木簡は調査区東端の微高地を形成する熔岩礫直上から二点、凹地から二八点の計三〇点が出土した。微高地の上部や縁辺の整地層上から、九世紀前半から一世紀後半にかけての遺構が検出された。しかし遺構は少なく、柱穴、井戸、溝、土壤等が検出されたにすぎない。その中で微高地の縁辺で検出された柱穴は、単独であり、付近の沼状凹地内から木製模造品が多く出土しており、関連が注目される。

行つた。

凹地縁辺では黒灰シルト上に、熔岩を使用した整地層が認められた。

凹地の黒灰シルト層からは木簡一六点が出土している。同層からは、木製模造品・容器類・服飾具等の木製品と、九世紀前半の土器類が多量に出土している。ただ凹地東岸の土器類は須恵器・土師器類が限られるのに対し、西岸では土師器甕類も相当みられる。

昨年出土の「大同五年」銘の木簡は、西岸の同層からの出土である。

凹地東岸の整地層からは木簡一点が出土し、同層から木製模造品・服飾具・容器類等の木製品と九世紀前半の遺物が多量に出土している。西岸の整地層からも木簡一点が出土しているが、この層中からの遺物は少ない。微高地上の整地層下で和同開珎が、西岸南の整地層上面で富寿神宝が出土している。

灰色シルトからは木簡一点が出土している。同層出土の遺物には将棋の駒・須恵器椀・土師器皿類等があるが、少量である。同時期の遺物の中には「上」と漆で書かれた土器がみられる。

この他、黒灰シルト上面及び灰色シルト層の下から、木簡九点が出土している。ただ両層間では、九世紀前半の遺物を中心に、一〇世紀前半、一一世紀後半の遺物が混在している。

8 木簡の积文と内容

一 沼状凹地西岸

整地層

- (1) 「造寺米残

・「弘仁三年 (題籠軸)

(284) × 19 × 4 061

二 沼状凹地東岸

黒灰色シルト

(2) 「九条五石立里廿三桑原墾田百廿八×

(238) × 37 × 6 019

(3) × □□□□□〔マガ〕石足

(137) × 20 × 3.5 059

(4) [] (題籠軸)

(145) × 21 × 7 061

(5) 「(符籤)×

(146) × 39 × 3 081

整地層

(6) 「式部卿

(題籠軸)

・「□文

(題籠軸)

(128) × 16 × 6 061

黒灰色シルト上面及び灰色シルト層の下

(7) 「寛平七年六月四日

(210) × 38 × 6.5 019

(8) [] 為本也×

(116) × 34 × 6 019

(9) 四々十六 三四十一 一四八

091

(10) × □土〔居カ〕×

(160) × (22) × 8 081

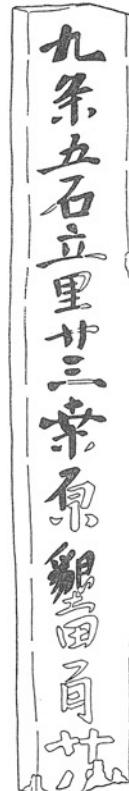
灰色シルト



(1)

(1) は造寺に関するものであるが、現在但馬では、弘仁年間に官寺の建立が行われたという記録ではなく、国分寺等の維持・管理に関するものとも考えられる。(2) は条里地名と通称地名呼称を併記したもので、墾田の管理に関するものと考えられる。石立里は現在の国分寺の西側に石立という地名が残り、その関連が注目される。

(2)



- (1) [左ガ] 納所検納富次負作田捌段九□三坪内
右件作田寛治七年貢米未進□□□検領□嘉保×
(428) × 40 × 6 059
- 三 微高地上
- (2) × [三カ] 斗中□□上□
(13) □ (題籤軸)
(134) × 20 × 4 059
- (113) × 21 × 9 061

出土した木簡のうち(1)・(4)・(6)・(13)のような題籤軸は八点あり、

内容的には、田と稻の管理に関するものが多く、昨年出土の木簡に「佐須郷田率」と訳読できるものがあることから、それが但馬国内の他郡にまで及んでいたことが窺える。
また年号では、(1)の弘仁三年(ハ一二)の他、訳文が確定しなかつたので今回も報告できなかつたものの中にも、弘仁三年、弘仁四年といった年号がみえ、昨年出土の大同五年と合せ、国府移転の年に近い年号であり、注目される。

(1) は造寺に関するものであるが、現在但馬では、弘仁年間に官寺の建立が行われたという記録ではなく、国分寺等の維持・管理に関するものとも考えられる。(2) は条里地名と通称地名呼称を併記したもので、墾田の管理に関するものと考えられる。石立里は現在の国分寺の西側に石立という地名が残り、その関連が注目される。

この木簡は氣多郡内の条里復原に、大きな意味を持つものと考えられる。

(7)・(8)・(10)・(11)は墨が剥落し、墨痕が浮き上っている。(11)は記載

内容・性格など注目されるものである。

釈読は奈良国立文化財研究所寺崎保広氏の御教示による。

6 関係文献

木簡学会『木簡研究』第八号（一九八六年）

（吉識雅仁・甲斐昭光）

兵庫・初田館跡

はつだ

1 所在地 兵庫県多紀郡丹南町初田

2 調査期間 一九八六年（昭61）九月～一九八七年二月

3 発掘機関 兵庫県教育委員会

4 調査担当者 岡崎正雄・山田清朝・山上雅弘

5 遺跡の種類 集落跡・館跡

6 遺跡の年代 古墳時代後期、平安時代～室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（篠山）

初田館跡は、JR線篠山口駅より南東約1kmの武庫川と篠山川との分水界のある田松川と新田松川に挟まれた、標高約196mの自然堤防上に位置する。周辺には大沢城・高仙寺城等の中世山城が多く点在する。日本道路公団が近畿自動車道舞鶴線を建設するのに伴い、発掘調査が行われた。初田は中世の大甘保、後の酒井庄の内にあり、初田館跡については、寛政六年